

学校番号	24	学校名	静岡県立伊豆の国特別支援学校	校長名	早田公子
------	----	-----	----------------	-----	------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	自己評価	関係者評価	意見
安全・安心①	児童生徒が安全に安心して生活できる学習環境の整備や危機管理体制を構築する。	緊急時や災害時の職員の役割や動きを理解し、適切に対応できた。	A	A	・来年度は地域との連携や地域での防災についても検討。充実を期待する。
		児童生徒が自分で身を守るための安全教育を実施した。	A	A	
		校舎内や地域の危険場所の確認や改善を行うKY（危険予知）ミーティングを、各学期初めに全職員縦割りで行って年3回実施した。	A	A	
		安全点検を実施後の対応を100%実施した。	A	A	
安全・安心②	児童生徒一人一人の 人権が尊重され、いきいきと活躍できる教育活動を実施する。	学部会でミニ人権講座を実施した。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者の声を聞く講演会の成果として、校内に当事者に寄り添う姿勢が教員同士で共有されていると感じる。そのような実践の中で、児童生徒が育っていくと思う。 ・「日常の人権感覚を磨くこと」というおさえと取組がよい。 ・静岡きょうだい会の代表の話からも実践のように、周りの大人が、周囲のちょっとした言葉掛け、視線等、気にかけて接することが大切と感じた。 ・取組目標の安心安全について。教員の使命として児童生徒の人権をどう守っていくか、インクルージョンに向けて児童生徒の権利を保障していく意識をもつことが大切である。特別支援学校でインクルージョンへの意識をどのように扱っていくか。次の課題になると思う。
		3分間セルフチェックで毎月、人権感覚チェックを実施した。	A	A	
		児童生徒一人一人に合ったコミュニケーション方法を学年や学部で共有した。専門家による指導助言を年3回、当事者の講演会を年1回、実施した。	A	A	
専門性①	新学習指導要領に沿った12年間のつながりのある教育課程を実施する。	実践の成果を共有し、次年度に向けてカリキュラム・マネジメントシートとシラバスの見直し改善を12年間のつながりの視点で行い、教員間で共通理解をした。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・専門性の向上の自己評価が高いのがよい。ラーニングマップやシラバスと形にしているところがよい。実践を本にまとめるなど形に残していくことで、積み重ねの実感ややりがいにもつながっていると思う。 ・教員の専門性について 98%が実感していることはとてもよい。よい実践をしているので、今後、学校としても、教員一人一人としても、

様式第5号

		シラバスの達成に必要な教材教具を整えた。	B	B	どう維持していくかが大切である。
専門性 ②	児童生徒の適切な実態把握と課題設定により、確かな学びを積み上げる国語・算数（数学）の授業実践力の向上を図る。	ラーニングマップによる児童生徒の学習状況の評価を年間3回行い、国語・算数・数学の授業で、児童生徒が何を学んだのかを明らかにした。	A	A	
専門性 ③	将来の生活を豊かにするためのキャリア教育のあり方を考える。	全職員が、なぎのはプランをキャリアの視点で見直す事ができた。教職員向け進路研修や高等部見学を実施した。	A	A	
連携 ①	児童生徒の良さと本人・保護者の将来の願う姿を共有する個別の教育支援計画、個別の指導計画（以下、伊豆の国書式個別）に基づき、保護者関係機関との連携を図る。	児童生徒の良さを学校と保護者で共有し、伸ばすことができた。伊豆の国書式個別を保護者や関係機関との連携に活用した。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者は個別の教育支援計画、指導計画とはどのようなものか深く学ぶ機会がないため、意味を十分に知らない保護者もいる。丁寧に説明する機会があったほうがよい。教員にとっても改めて学び説明できるようにしたほうがよい。 ・現在は、働く保護者も増えている。保護者に寄り添う支援として、保護者自身も毎日の生活で大変であるということを、学校側も理解していくことも大切である。 ・校内での12年間の繋がりに合わせて、高等部卒業後の引継ぎも移行支援会議の中で、本人の成長として進路先に理解してもらえると、よりよい社会生活への繋がりとなりうれしい。 ・保護者評価はB（だいたいそう思う）が多い。A（大変そう思う）にできていくとよい。
連携 ②	積極的に地域と関わり、学校や児童生徒について、地域への理解啓発を図る。	地域資源を活用した学習を実施した。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・つなぐつながるプロジェクトは、小中高それぞれ等身大の交流ができています。自然に生活の中に地域があり、地続きで広がっていくとよい。そのためにも、カリキュラムマネジメントを確実にやり、交流等をイベントではなく、学習の一環として取り組み、教員間で行う意味や目的を理解するとよい。一年目は点、二年目は線、三年目は面になりそして立体へ、これから交流の精選、発展、充実が必要である。 ・コロナ禍の中であるが、児童生徒や教員と一生懸命に取り組んでいる。それが保護者にどう伝わっているか。いろいろなツールを通して伝えていくことが大事である。 ・地域資源の活用について、もっとPRしてもよい。画面では伝わりにくいことをどのように伝えていくかを工夫したい。 ・韮山地区特別支援教育協議会の設置とそのねらいがよい、期待したい。
		ホームページ(二週間に1回更新)、学校だより、児童生徒の作品等で、情報発信をした。	A	A	
連携 ③	外部機関や有識者と連携し、社会の変化に合わせた学校の担う役割について考える。	コミュニティスクール、就業促進協議会等を開催し、得られた助言や情報を共有した。	A	A	

様式第5号

					<ul style="list-style-type: none"> ・伊豆総合高校とのものづくりを介した交流は、特徴がいかさされていてよい。 ・ホームページで世間との交流が推進される。情報の発信はもっと工夫する必要がある。見る人が見てみたいと思い、わくわくするようなものになるとよい。
チ ー ム 学 校 ①	教職員一人一人 がやりがいをも ち新しい学校づ くりへ参画す る。	提案について、学部 会・分掌部会・主任会 等で話し合うことが できた。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価が高いということは、やりがいをもって取り組んでくれているということ。教員の自己肯定感が高い教育現場はとてもよいことである。 ・仕事にとってやりがいはとても大事である。そのような教員が多くうれしく思う。 ・校歌を自分たちで作る、みんなの声が集まり、みんなにとって大事なものができた。一丸になって作りあげたことはすばらしいことである。
		管理職との面談等で、 自身が学校づくりで 力を発揮したいこと や、自分の得意分野を 伝えることができた。	A	A	